



こんなことあったよ！ のしろ白神ネットワークの活動レポート

平成 23 年 3 月 5・6 日(土・日)

手這坂冬まつり 編

3月5日、6日に手這坂の冬まつりが開催され、2,500 個のミニかまくらをみんなで作りしました。今回は、能代市教育委員会生涯学習課の銭谷さんとの参加です。銭谷さんは、廃食油のろうそく作りもお手伝い下さる、頼もしいサポーターです。このミニかまくら作りの楽しさと、幻想的な美しさを是非子供達の学習の場にと考えているのですが、実現を目指したいものです。

手這坂活用研究会の大高会長さんや事務局の嶋津さん、牛丸さん達との作業は会話が弾むとても楽しいもので、いつも楽しみにしています。今年は、このかまくら作りを7年前に企画された故山崎先生の奥様が初めて参加され、一緒に作業をしました。私は研究会ができた由来も分からず皆さんと活動しておりましたが、10 年以上の歳月を費やし、何とかこの風景を残そうと努力する、会長さん達の熱い想いを是非お聞きしたく、今回のレポートをお願いしました。

文：能登 祐子

「手這坂研究会」が現在に至るまで……。

■発足の経緯

平成 12 年旧峰浜村の振興施策策定委員会の席上、この年の春に最後の住民が転居して、無人の集落になりましたが、「この集落の保存活用方法はないか」との意見の申し入れを、委員の1人として私が発言致しました。この時の事務担当が嶋津(現事務長)でした。この会議で取り上げられることは叶いませんでしたが、その後、当時木高研におられた鈴木有教授が民家調査を引き受けられ、特別に文化財的価値ある建造物では無いが、茅葺民家 4 軒が集落を成している風景は貴重であり、残したいものだとの結論をいただきました。

この調査と一緒にされた(故)山崎光博秋田県立短期大学(当時)教授が、研究室の学生を引き連れて集落内住宅の周辺整備を始めたこと知り、仲間に呼びかけ、学生と一緒にボランティア活動を始めました。翌平成 13 年に当時の活動参加者に呼びかけて、研究会を発足致しました。



ミニかまくら作りには毎年色々な工夫がなされています。今年は左のものが登場。口が細いと深いのが難点でしたが、少し手を加えれば、右のようにきれいにろうそくが灯ります。





こんなことあったよ！ のしろ白神ネットワークの活動レポート

■活動内容

雨漏りの激しかった茅葺屋根の補修を重点に当時、村で唯一の茅葺職人を副会長に迎えて作業指導を得ながら実施。集落内、民家の前面にある水田は、一部会員の日曜農業の拠点として稲作に励むなど、活動の充実が図られてきました。桃の木も植え、次第に「桃源郷」の風景が蘇ってきましたが、昨年からの活動資金が枯渇し、遂に屋根の修復作業もできないままに陥っています。

春は桃の花を愛でる「春まつり」、夏は茅葺修復作業とホテルと触れあう「夏まつり」、秋は収穫を喜ぶ「秋まつり」、ミニかまくらにローソクの火を灯して楽しむ「冬まつり」と季節のまつりに集い楽しんで来ましたが、現在は夏と秋は休眠状態です。特に夏は、恒例の国際教養大学生によるインターシップもなくなり、屋根の修復作業もできないためと、減反によりホテルも多く乱舞する状況にありません。また、秋の収穫まつりも中止となっています。ただ、集落内に植えた桃の木は 250 本となりました。これらが成長して花が満開になる頃には、正に「桃源郷」となることと思います。

■今後の方向

家主、地主の個人所有地であるため、公的資金の投入が難しく、今日まで日本財団やトヨタ財団などの民間の活動資金や秋田県の「きらめき事業資金」「景観モデル事業資金」などを活用して来ましたが、資金が枯渇している状況を打破するため、町当局に要請して、家主、地主との契約を委ねて、具体的活動を官民一体となって推進していきたいと考えています。

手這坂は観光地ではありませんが、これまで多くの新聞、テレビ、書籍などで活動が紹介されたことと、町の観光パンフレットに掲載されたこともあり、多くの観光客(?)が足を運ぶところとなりました。最終目標は、限界集落となった無人集落に人々が帰ってきて、賑やかな人々の触れあう場所を創出することです。今後とも、ネットワークの一体として手を携えて参りたいと思っています。ご指導、ご協力を戴きたくお願い申し上げます。

文：大高 孝雄



雪解け後の最初の仕事、野焼き(上)。田植え間の水田の水鏡(下)。



青々とした初夏の水田(上)。実りの秋、稲刈り直前(下)。